

甲府市八幡神社採集の縄文土偶

小野正文

1 経緯

この土偶は1993年に竜王町在住の上野大輔君が、甲府市武田の八幡神社境内で採集したものである。その後この遺物が何であるか、山梨県立考古博物館に実物を持参して預けられ、筆者が内容について検討していたものである。この間、多くの時間を費やすことになって、上野大輔君並びにご家族の方々および仲介の労をとられた原裕貴子氏にたいへんご迷惑をおかけした。ここにご寛容を願うとともに資料紹介をする次第である。

2 土偶について

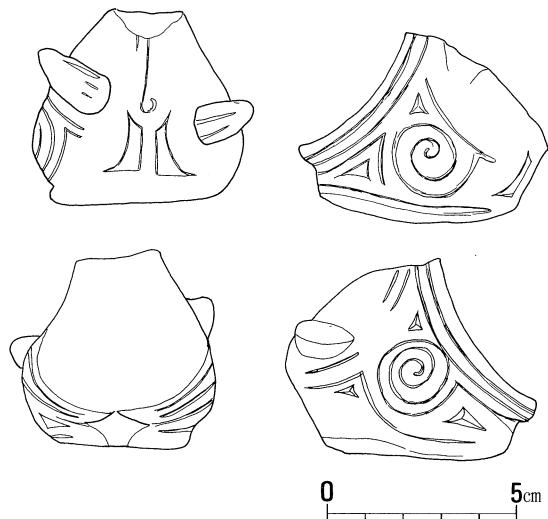
土偶全体は灰黒色をなして、全体に表面が荒れている。これは粘土質の土層に包含された土器、土偶にしばしば見られる現象である。甲府市の屋形から武田の一帯はほぼ粘土質の土壤なので、この土偶はこの付近の出土と思われるが、遺物の原位置についてはやや不安が残る。

土偶は頭部と両腕を欠損しているが、両手を側腹部につけている。脚部は省略された安定感のある土偶である。胸部から腹部にかけて生中線が沈線で描かれ、臍の部分で曲がっている。突き出した腹部の中央下には対象弧刻文があり、中期前半の土偶であることは明らかである。臀部にはひし形文が陰刻されている。側腹部には沈線による渦巻き文と三叉文が陰刻されている。沈線文は表面が荒れていてはっきりしないが、結節であった可能性もある。

3 土偶の意義

脚が省略されていることから、座して両腕を輪にして手を側腹部に置いた姿勢をなすものと思われる。かつて藤森栄一氏によってお産をする土偶として紹介された長野県広畠の土偶と同形の土偶で、筆者が広畠形態の土偶と分類したものである。類例としては県内では上野原遺跡、釈迦堂遺跡群、東京都神谷原遺跡、長野県広畠遺跡にある。

こうした特徴ある形態の土偶は、縄文中期の集落のどの住居にも伴うものではなく、ある特定の住居に伴う可能性があり、土偶祭式のなかでも重要な位置を占めていたものと思われる。





甲府市八幡神社採集の縄文土偶写真